

GREEN EARTH 緑の地球

1992・4

3

- ヒマラヤ山麓に緑の海を /P 2
- 洗剤問題で韓国に交流の旅P 4

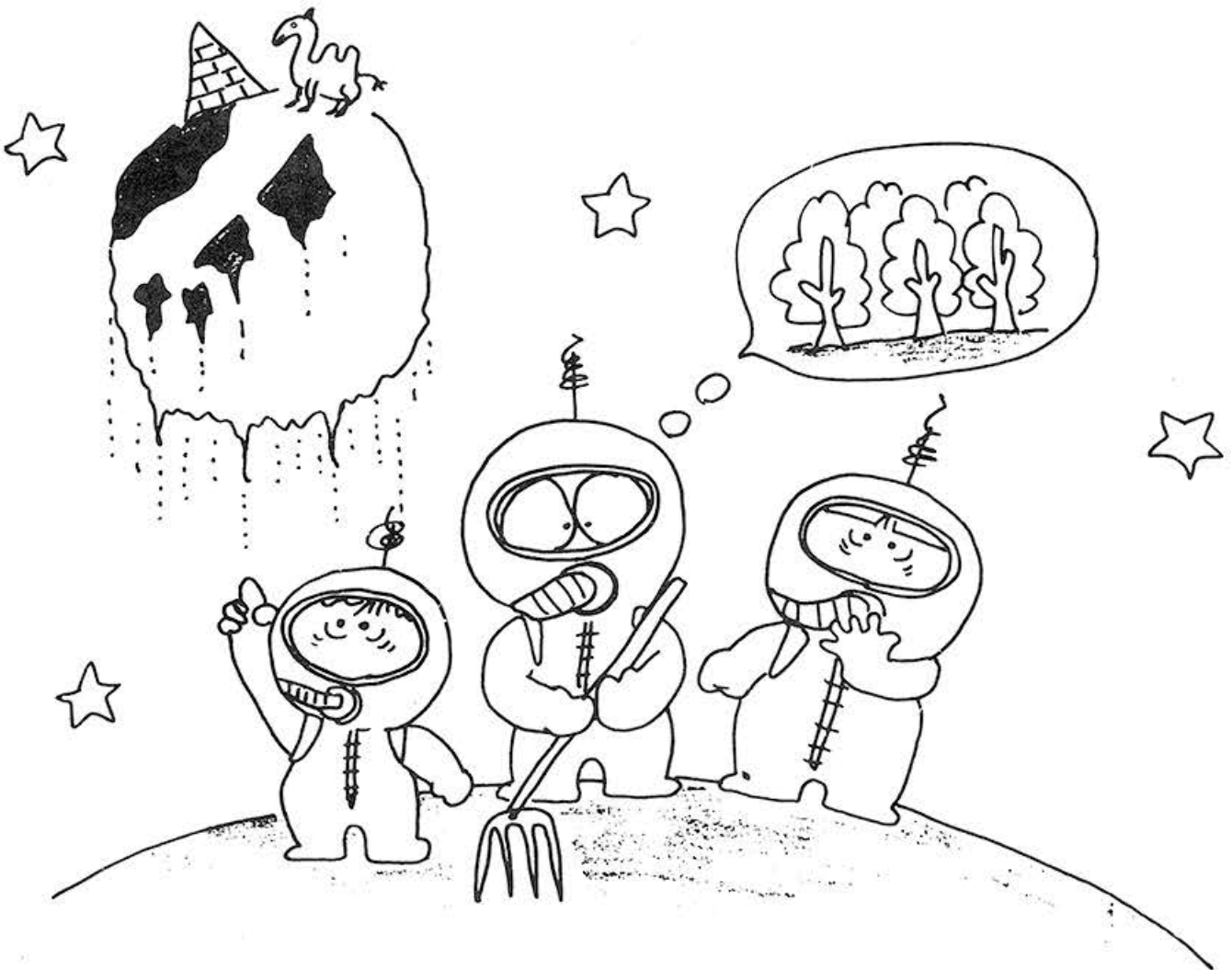
地球環境のための国境をこえた民衆の協力

COM21 通巻297号 発行/COM企画室

毎月1回15日発行
定価/150円
年間購読料/2,000円
(送料共)

編集/緑の地球ネットワーク(準)
Green Earth Network
大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739 (☎552)
郵便振替 大阪 4-128465

砂漠を土にしてもいいですが
土を砂漠にしてはいけません



絵の提供・奥蘭壽子さん

(松尾嘉郎、奥蘭壽子著『ヒトの命を支える土』農文協より)

ヒマラヤ山麓に緑の海を！

佐野茂樹（緑の地球ネットワーク代表世話人）

ティベットのラサ川のほとりで、静かに渦巻く流れに見入っていた時、思いはヒマラヤを越えてデルタ地帯に飛んだ。なろうことなら、ヤクの皮舟に乗ってヤル・ツァンポに出、ブラマブトラの激流を下ってガンガーに合流したい——そんな誘惑にかられた。ともにティベット高原に源を発する二つの流れがヒマラヤ山脈を西に巻き東に



荒れた山々

巡って平原で合流し、大デルタ地帯をつくる。パングラデッシュに住む人々は、古来、両大河から溢れ出る水と肥沃な土に依拠して農耕を営んできた。この恵みの洪水が禍に転じて、すでに四分の一世紀になるだろうか。

昨年にも惨害をもたらしたように、しばしばサイクロンが強襲し、地球温暖化による海面水位上昇の危険にさらされている上に、洪水の常態化である。1988年、国土の三分の二が冠水したことは記憶に新しい。この下流の大洪水と上中流域の森林消失とは、切っても切れない関連があるにちがいない。

ブータンの森林は健康だといわれる。だが、ティベットは、北部インドは、そしてネパールは？

ネパールの森林は急速に失われてきた。森林率は1985年政府統計では37.6%、だが1988FAO統計では16.4%に下落、あっというまに半分以下になった。1981年1,500万の人口が、90年には1,900万を越えた。この増勢は著しい。

これだけの人口が15万平方キロの国土の0.7%以下の地に住み、18%余の農耕地に拠って食糧を自給する。最大の地形的特徴は、8,000メートル級を含むヒマラヤが東西にそびえ立つ北辺から、600～3,000メートルに達する山また山が陸続する丘陵地帯をはさんで、南縁の東西に伸びる平野部・タライの最低点標高

60メートルに至る南北の隔たりが200キロに充たない点にあらう。モンスーンは6月～9月に集中して全土に降り注ぐ。降雨量は多く、多数の支流を集めるコシ、ガンダキなど四大河が更に南に下ってガンガ＝ブラマブトラに流れこむ。木のまばらな山間部からも、切り開かれた平野部のジャングルあとからも大量の表土が奪いとられる。

殆ど唯一の熱源である日々の薪需要が森林を奪う圧倒的な要因である。むろん用材も、水牛や山羊の飼料も。観光客のもたらす荒廃も大きい。そして新規開拓のための伐採が追いつくかをか



カトマンドウの街角で遊ぶ子供たち

ける。森林と耕地とは非常に緊張関係にある。だが、「今」の必要を充たすだけではなく、少し先の将来のために、森林再生は緊要事である。流れ去る水は雨になって循環してくるが、水が奪う土は戻ってこない。農業が人口・産出とも90%を超えるネパールで水土保持は運命の鍵であらう。土の代替物を人類は見出すことはできない。

ヒマラヤ山麓の緑を回復しよう。そのためにネパールに身を運ぼう。そして、地域の生活者たち——棚田で耕作する青年たちや、草原で遊牧する人々や、超重労働である水運び・薪運びをする婦人たち、飼料運びをする少女たち……の緑回復の苦闘に力をあわせよう。



山頂から刻まれた棚田

第一次「中国緑化協力団」5月6日出発

〈5月末に帰国報告会〉

1月に合意した中国山西省渾源県での緑化協力を具体化するための「中国緑化協力団」（石原忠一団長、西山五郎副団長）は、5月6日に大阪を発ち、上海、太原、五台山をへて現地にむかいます。地元でおこなわれている植樹活動に参加するとともに、今後の協力をより有効にすすめるための環境

全般の考察と協議をおこないますが、あわせて地区の青年たちがすすめている桑干河緑化プロジェクトの見学もおこないます。またこの団は、会員ならびに広範なみなさんから寄せられた緑化協力資金を現地にとどける大任があります。

また団の日程だけでは協議と考察の

時間がじゅうぶんとれないため、佐野茂樹、高見邦雄の2名が4月26日に先発し、相互理解と協力関係をより深めることにしています。

団はその後、大同と北京をへて5月18日に帰国の予定です。5月末には報告会を開催する予定ですので、みやげばなしを楽しみにしてください。

ヒノキの山を見学し 50本の苗木を植えました！

4月5日、緑の地球ネットワークの初めての野外活動である“自然と親しむ会”が、春たけなわの能勢町で行われました。数日前から降り続いた“なたね梅雨”もあがり、11時前に現地に着いた時には晴れ間ものぞくほどの幸運にめぐまれ、参加者もこども10人を含めて総勢40人になる盛況でした。

まず着いたのは、能勢町下田尻の奥登さん宅。奥さんはおじいさんの代からの林業農家で、高校の教師をしながら山を守ってきました。数年前に起こったゴルフ場問題がきっかけで、都会の市民と協力して、実際に山林作業をしながら山を守っていくことの大切さ、楽しさを求めて実践していく「一



辿りつくだけでひと汗。植樹の方法を聞きながらいざ作業開始。

本の木の会」ができました。現在、約100人の会員で、毎月1回の山林作業を続けているそうです。将来は自然学校も計画しています。

奥先生のこのようなお話、枝うちロボットやいろいろな山の道具、作業のあらましなどを聞いた後、裏山に登って、植えてから5年目くらいの林を見ました。よく下刈りされた斜面にはワラビが生えていて、こども達も大喜び。炭焼き用の“台場クスギ”の林、尾根ちかくの自然の雑木林や赤松林も見ました。

名月峠の五分咲きの桜のもとでお弁当をすませた後、能勢町森林組合へ移動。「緑の地球」2号で紹介された城阪さんの、日中緑化協力への熱い期待のお話を聞き、植樹の現場へ案内されました。わずか50本でも、実際に植えるのですから、植え方を説明して下さる菅沼さんの話真剣に耳を傾け、交代でクワで穴を掘り、無事に植樹を終えました。「名前



野間の大けやき・樹齢約1000年

を書いておいて、5年後、10年後に見にきたい」という気持ちになりました。

帰りには、能勢町野間の大けやきを見物。おとな11人が手をつないでやっと取り囲めるほど。何人かはさっそく気功状態に入って樹霊との対話を楽しんでいました。

4時すぎにそこで解散し、能勢の人々と豊かな自然に感謝しつつ帰路につきました。

【ちょっとクイズ】この記事の中に植物の名前が何種類出ていますか？よく捜してネ。答えは8ページ

示唆に富んだ中村尚司さんの講演 「関係性」から自然・社会を見る

これほどまで深まった地球環境危機を打開するためには、経済をはじめとする社会関係の基本にある価値そのものの見直しが急がれています。緑の地球ネットワーク（準）は4月29日、中村尚司さん（龍谷大学教授）を招いて「物は小さく、関係は豊かに」と題する講演会をもちました。

中村さんは生命系にとっての大原則＝循環性・多様性・関係性のうち、とくに関係性に重点をおいて話をすすめられました（要旨は次号）。エントロピー論にくわしく、アジアの諸地域の

社会関係に通じ、さらに外国人労働者問題などに実践的にとりくんでおられる中村さんの話は、独自の新鮮な内容を含んでおり、はじめて聞く人にはむずかしいところもあったようですが、その後の質疑応答のなかでより具体的な内容が展開され、40名余りの参加者は知的な興奮と深い満足感をもって帰



刺激的な中村さんの講演に、活発な質疑応答がつづいた。

途につきました。

私たちがすすめている活動にとっても、貴重な示唆がたくさん含まれており、もっと時間をとって、じっくり議論を深める機会をぜひ設けたいと思っています。

洗剤問題で韓国へ交流の旅

坂下 栄 (医学博士)

これまでの日本との関係を考えるととても行けないと考えていた韓国へ洗剤問題の交流で行くことになった。わずか6日間、しかも講演と記者会見が5回というスケジュールでは実情を理解したとはいえないが、私の見たこと感じたことを書きます。

韓国での洗剤問題

まずはソウルの交流会。参加者が集まるあいだに15社ほどの報道関係者がつめかけ記者会見。日本の合成洗剤メーカーの私に対する批判文を入手しているメーカー、それと結託している新聞社の発言が時間をとり、反公害女性グループが発言できなくなるのは日本といっしょ。メーカー同士のみごとな連携をみて、消費者運動の密な交流の必要性を改めて痛感した。

翌日は水原(スオン)で、生活クラブ生協と8年来提携している京畿道(キョンキドウ)協同組合連合会の組合員200人の集まりで講演。これはKBS(国営テレビ)の翌朝のワイド番組で放映された。講演を終えるとすぐ特急で3時間の大邱(テグ)に移り、3日間連続の講演会。教会を会場にした2日目は、小学生を含む老若男女250人が夜10時の終了まで席を立たずに聞いてくれた。

洗剤問題は韓国でも他の公害問題と同様、数年前から問題になりはじめ、昨年あたりから新聞もとりあげて、急速に関心が強まってきた。主婦たちの手作り石けんが始まり、生活クラブ生

協で研修した人たちが始めた廃食油からの粉石けんも、この4月から販売される。

韓国の公害問題

昨年4月、1000万人の水源地=洛東江(ラクトンコウ)に、電子メーカー斗山(ツサン)から、3日間にわたって1日30トンのフェノールが流入する事件があった。川の周囲に異臭がただよい、キムチまで強いフェノール臭を発生したという。

すぐさま42団体の参加で洛東江再生運動協議会が生まれ、とくにテグ・ウーマン・クリスチャン・アカデミーの主婦たちがメーカー、行政への抗議行動、ピケをつづけ、40日間の操業停止へ追い込んだ。「昔だったら簡単に逮捕されただろうけど……」と1年前を振り返っての話が印象的だったが、私が招かれたのも、その1周年記念行事としてのことだった。

クリスチャン・アカデミーは人権問題や差別問題、女性解放問題に長く取り組んできたが、昨年の事故以来、環境問題を重視し、無農薬農産物の共同購入などもはじめている。

オリンピックからの韓国の開発はすさまじく、ソウルの漢江、大邱の洛東江とも護岸工事中で、水は褐色。濁水状態の川がいくつもあった。建設中の高層ビルがいたるところにあり、高層マンションタウンもすごい数だ。広い高速道路と自動車の渋滞、砂煙もほんとうにひどい。

ハッサクの次は



『土佐小夏』です

高知県甲の浦の田中隆一さんが生産している完全無農薬ハッサクの購入をお願いしたところ大勢の方からの注文がありました。田中さんより収益の一部をGENにカンパしていただきました。

4月下旬からは特産の「土佐小夏」の出荷が始まるそうです。小粒でとっても美味しい蜜柑だそうですので、ひきつづき利用してください。注文の際には、「緑の地球ネットワークの紹介」だとひと言つけ加えてください。

価格 5kg入り・3500円

送料 関西 620円・関東 820円

時期は4月下旬～5月上旬まで

TEL .08872-9-2260

FAX .08872-9-2500

※5月には「やまもも」の出荷もあるそうです。お楽しみに!

それでも水原から大邱にむかう車窓からは、緑の山が見え、冬枯れの並木にかかる野鳥の巣が心をなごませてくれる。

日本に対する民衆の感情などにふれるスペースはないが、私としては、真の民衆レベルの交流、共同行動の必要性を、つたない英語で理解しあえたのが最大の収穫だと思っている。